

平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想の概要

指定期間	ふりがな	がっこうほうじんしゅがきょういっくがくえん まくはりこうとうがっこう				②所在都道府県	千葉県
26～30	①学校名	学校法人渋谷教育学園 幕張高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	1051 (高校1年～3年)	
普通科	355	355	180	-	890		
⑥研究開発構想名	多角的アプローチによる交渉力育成プロジェクト						
⑦研究開発の概要	<p>「食」にまつわる諸問題の分析を複数教科の授業時間において様々な観点から試み、生徒自らが問題点を発見し掘り下げる主体的な取り組みを目指す。総合学習の時間を活用し、論文作成や討論の場を設け、英語力の増強とも相まって、問題解決にむけて Win-Win の妥結点に至る交渉力の養成を目指す。</p>						
⑧ 研究開発の内容等	⑧ -1 全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>生徒が Global Issues について立場の異なる者と英語で意見交換を行い、Win-Win の妥結点に至るための交渉力の育成を目的とする。そのために本校では諸外国より学生を呼び、国際会議を開くことを目標とし、その準備段階から会議への参加までの過程で生徒の交渉力の伸長を図る。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>Global Issues は扱い方が多岐に渡るため、教科を超えた取り組みが求められる。さらに生徒に自発的な問題点発見の機会を保障することが生徒の学びを深めるために必要だ。課題研究のテーマを生徒にとって身近な「食」に設定し、複数教科にまたがり全校規模で研究に取り組むことで、生徒は様々な視点に触れることになり、問題に対する理解を深められるだろう。さらに、問題を他国の生徒と議論することで、背景や立場の違いによる「食」をめぐる意見対立や利害関係が鮮明になり、生徒は時事問題全般に対する問題意識や問題に対する多角的な視点を涵養し、関係者皆にとって有益な Win-Win の妥結点を模索し交渉する基盤を築くものと考え。</p> <p>他国の生徒との議論を建設的な方向へ活性化させるためには、英語における交渉力が必須である。本校は、相応の英語科教員を増やし配置し、「英語表現Ⅱ」の授業にネイティブの教員と日本人教員によるデュアル・ティーチングを導入する。これにより、英語力、論理的思考力、発信力の育成がより効果的になり、結果として CEFR の B2 レベルに達する生徒の増加が期待できる。</p> <p>さらに、Global Issues への理解と英語による発信力強化を実際に活かす場として、本校は期間中に2回の高校生国際会議を開き、研究開発の集大成とする。実践の場を設けることが課題に取り組む生徒のモチベーションの向上に繋がると同時に、その会議での経験が生徒の進路に影響し、将来国際的な舞台への進出の動機づけともなると期待する。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <p>研究開発成果を記録し、広報する。本校のホームページにスーパーグローバルハイスクールのページを追加し、その充実を図る。また、英語のページを拡充する。本校の取り組みに関心をもち、問い合わせがあれば情報を共有する。また、見学・講演等の依頼があれば対応する。</p>					
		⑧	<p>(1) 課題研究内容</p> <p>「食」は人類が生きていくうえで必要不可欠な要素である。途上国では貧困が、先進国では飽食が国際的な問題になっている。生活や健康を維持するための「食」に関する問題点をグローバルな視点から研究する。具体的には下記のような課題が考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・和食はなぜ世界文化遺産に成り得たか。 ・遺伝子組み換え食品は真に安全か。 ・なぜ日本は捕鯨問題において孤立するのか。 <p>(2) 実施方法・検証評価</p>				

<p>-2 課題研究</p>	<p>高校1年では自国の文化を知ることが重点に置く。例えば家庭科における和食研究は、日本人として外国と交渉する上で基礎になる重要な部分である。現代は、日本型食生活が変化し欧米型に近づいているといわれている。和食のすばらしさを学習することを通して、欧米食がなぜ生活習慣病に繋がるのかなど、グローバルな視点からの問題点を探る。調理実習の他、専門家に依頼して和食の文化・作法についての講習会や食をテーマにした講演会を開催し、食に対する理解を深める。さらに海外研修において、地元の食品工場訪問、現地レストランの協力を得るなどして調理実習や市場の視察、料理人や専門家による講義、質疑応答などを実施する。</p> <p>高校2年では、他教科でも食に関するテーマ研究を行う。理科では、遺伝子組み替え食品の見極め実験を実施する。遺伝子組み替えに詳しい研究員を招く。地歴公民科では、夏期休業などを利用し、食品工場、市場、漁港、農家などを見学する。保健体育科では、食品衛生に関して、保健衛生の専門家を招き、講義・質疑応答を実施し、その後、HACCP（ハサップ）「危害分析重要管理点」が導入されている食品工場を見学する。</p> <p>高校3年の「英語表現Ⅱ」では、今まで研究してきた食に関する個人研究を英語に要約し、授業内で発表する。各教科での取り組みを総合学習で行う論文作成につなげる。</p> <p>関連教科で「食」と関連づけたテーマを設定して、Research Studiesの形態で研究を行い、レポートを作成する。その過程においてフィールドワークや実習、交流会などを導入する。国内研修や海外研修の場なども利用しながら、現地高校や大学、研究機関、企業などを訪問し、高校生や大学生、留学生、社会人との交流を通して調べたことを検証して大学講師や関係者による評価をうける。学年でのレポート発表会、ディスカッション、最終的には国際会議を開催し、「食」に関するテーマの報告としてまとめる。高校3年では会議におけるリーダー的役割を果たし、総合学習で取り組んできた論文作成のまとめを行う。また、「英語表現Ⅱ」や新たに設置予定の選択科目を活用し、多くの生徒が今まで研究してきた内容について英語で発表や討論を行い評価する。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 なし</p>
<p>⑧ -3 上記以外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 新学習指導要領の「英語表現」の取り組みは多くの現場では難しいが、本校は「コミュニケーション力の向上」を遂行するために必要な教材、人材、その他必要なリソースを採用する。具体的にはホームルームを分割し、それぞれにネイティブの教員と日本人の教員のデュアル・ティーチングを採用する。日本語に極力頼らない環境で、集中的な英作文練習とインターアクションを行わせる中で、生徒の英語運用能力を高める。第2学年の終盤でスピーチ、第3学年の終盤のディベートを実施し、評価材料とする。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 なし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の実施内容・実施方法 大きく次の3つの時期を設定する。 第1段階：校内においてプレゼンテーションやディスカッションを行う機会を増やす。 第2段階：他校や東京外国語大学学生・留学生との討論会やワークショップを行う。 第3段階：海外の高校生を招いての国際会議を行う。</p> <p>(4) 幹事校としての取組 (該当しない)</p>
<p>⑨その他特記事項</p>	<p>第3段階の高校生国際会議は、関連校である渋谷教育学園渋谷高等学校と合同で開催する予定である。</p>

ふりがな	しぶやきょういくがくえんまくはりこうとうがっこう	指定期間	26～30
学校名	渋谷教育学園幕張高等学校		

平成26年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）		24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数									
a	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	150人
	SGH対象生徒以外:	40人	40人	人	人	人	人	人	30人
目標設定の考え方: 学年在籍数全体の約半数を目標にする。									
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数									
b	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	100人
	SGH対象生徒以外:	66人	81人	人	人	人	人	人	20人
目標設定の考え方: 課題研究活動を含む研修旅行を様々な面で補助するため、伸びが見込まれる。									
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合									
c	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	50%
	SGH対象生徒以外:	%	15%	%	%	%	%	%	15%
目標設定の考え方: 国際会議の実施や研修旅行参加者増でSGH対象生徒は3倍増程度で伸びが見込まれる。									
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数									
d	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	10人
	SGH対象生徒以外:	2人	3人	人	人	人	人	人	2人
目標設定の考え方: すでに高水準であるが、意欲的な数を設定した。									
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合									
e	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	90%
	SGH対象生徒以外:	15%	15%	%	%	%	%	%	80%
目標設定の考え方: 英語の独自カリキュラムで全校的な学力伸長を目指す。									
(その他本構想における取組の達成目標)									
f	SGH対象生徒:								
	SGH対象生徒以外:								
目標設定の考え方:									

1' 指定4年目以降に検証する成果目標								
	24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	目標値(30年度)
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合								
a	SGH対象生徒:		%	%	%	%	%	80%
	SGH対象生徒以外:		36%	39%	%	%	%	40%
目標設定の考え方: すでに多数進学しているのが、SGH対象生徒については倍増を目指す。								
海外大学へ進学する生徒の人数								
b	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	10人
	SGH対象生徒以外:		6人	2人	人	人	人	2人
目標設定の考え方: 選択肢として考える人が若干数増えることが見込まれるが、経済的負担が大きいことから多数は進学できない。								
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		%	%	%	%	%	90%
	SGH対象生徒以外:		-	-	%	%	%	50%
目標設定の考え方: 課題研究を通して大半の生徒に学術的な関心を刺激すると考える。								
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
d	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	100人
	SGH対象生徒以外:		-	-	人	人	人	70人
目標設定の考え方: 意欲が高まるが見込まれるが、一方で経済的な事情等を勘案すると卒業生の半数程度が該当すると考えられる。								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	人	0人	人	人	人	人	人	20人
目標設定の考え方： 10カ国、各2名。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	人	0人	人	人	人	人	人	30人
目標設定の考え方： 3研修、各10名。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	校	0校	校	校	校	校	校	5校
目標設定の考え方： すでに交流している学校に加え、新たな連携校を探す。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	人	0人	人	人	人	人	人	100人
目標設定の考え方： 課題研究活動に参画する連携大学の教員や学生および外部人材を積極的に招く。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	人	0人	人	人	人	人	人	50人
目標設定の考え方： 有識者や専門家、企業人を招いて講話を聴く機会を増やす。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	人	3人	人	人	人	人	人	50人
目標設定の考え方： SGHの取り組みが奏功する。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	95人	92人	人	人	人	人	人	95人
目標設定の考え方： 現状維持。								
先進校としての研究発表回数								
h	1回	1回	回	回	回	回	回	2回
目標設定の考え方： 現状維持								
外国語によるホームページの整備状況								
○整備されている △一部整備されている ×整備されていない								
i	△	△						○
目標設定の考え方： 整備する								
(その他本構想における取組の具体的指標)								
j								
目標設定の考え方：								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)	1,043	1,054	0	0	0	0	0
SGH対象生徒数							
SGH対象外生徒数							